

第四章 古墳時代

第一節 古墳時代の概観

巨大古墳の出現 古墳は東アジアに広く流布した厚葬思想に基づく墳墓で、土盛りをした墳丘に石室などの埋葬施設をもち、多くの副葬品を納めている。日本では三世紀末から七世紀末にかけて、南は九州南部から北は

東北中部にまで分布し、墳形も円墳・方墳・前方後円墳をはじめ八角形古墳など変化に富んでいる。中でも前方後円墳は、わが国独特の墳形で、巨大古墳が多い。大阪府堺市の百舌鳥古墳群にある仁徳天皇陵古墳は、墳丘の長さ四八メートル、高さ三六メートルを測り、総面積約四六万平方メートルで、現在三重の周濠がめぐっている。こうした大古墳の築造には莫大な労力を要するので、背後にそれを可能とした強大な権力の存在を知ることができる。

最古級の前方後円墳は、奈良県桜井市の箸墓古墳である。箸墓古墳は全長二七六メートル、前方部がバチ形に開く特徴的墳形で、卑弥呼の墓との説もある。この巨大古墳が突如、畿内に出現したことは、大和政権の成立という歴史的背景を鋭く反映している。前方後円墳は単なる埋葬の場ではなく、王権継承の儀礼の場でもあり、政治シヨウの舞台でもあったと考えられている。こうした前方後円墳は全国に約三〇〇〇基あり、畿内から地方に拡散していく状況は、地方の首長が大和政権に次第に服属していった過程を物語るものと理解されている。



図 I-57 箸墓古墳 (奈良県桜井市)

古墳の発展 と被葬者

古墳時代は通常、前期・中期・後期に三区分別れ、前期の前に発生期、後期の後に終末期の古墳という名称を用いて呼ぶこともある。

古墳時代前期は四世紀を中心とする時代で、内部主体は竪穴式石室や粘土槨で、副葬品には鏡・玉・剣といった呪術的要素が強く、被葬者の司祭者の性格を暗示している。副葬品の中でも三角縁神獸鏡は小林行雄の研究によって、京都府相楽郡山城町にある椿井大塚山古墳（全長一八〇メートルの前方後円墳）の被葬者を通じ、各地の首長に服属の見返りとして分配されたとする同範鏡理論が説得力をもっている。三角縁神獸鏡は、従来、中国（魏）から将来されたもので『魏志』倭人伝にみられる銅鏡百枚の記述などとの関連性が指摘されていた。ところが、最近、中国の学

者によって、三角縁神獸鏡が中国では出土しないことなどから、中国南部呉国の工人が日本に渡来して製作したとする説なども出されている。

中期は五世紀を中心とする時期で、墳丘の大規模化、分布の拡大のほか、内部主体にも横穴式石室が採用されるようになった。また、副葬品も馬具や武具といった軍事的性格のものが多くなり、被葬者の性格の変化を示している。畿内では古墳分布の中心が大和から南の河内・和泉へ移り、仁徳天皇陵古墳のほか応神天皇陵古



図 I-58 三角縁神獸鏡『古鏡』より

墳など、最大級の古墳が築造された。また、五世紀代は中国南朝の宋に大和政権が相ついで遣使した時代であり、倭の五王（讃・珍・済・興・武）の時代として知られている。

後期は六、七世紀で、多数の古墳が集中する群集墳を特色とする。群集墳の出現は、古墳の築造が支配者層のみでなく、有力農民の家父長層をはじめ地域集団の富裕階層にまで広まったことを示している。また、この頃には高塚古墳のみでなく、崖に穴を掘って墓室とした横穴墓が多く出現したことも特色である。

後期古墳の時代、すでにわが国には仏教が伝来し、有力豪族は権威の象徴として古墳に代り寺院の建立に努めた。さらに、埋葬にも次第に仏教的葬法である火葬が導入されるようになり、古墳そのものの存在意義が薄れていった。特に、大化改新後に出された薄葬令（六四六年）は古墳の規模を位階によって制限するなど、薄葬化に拍車をかける内容となっている。もっとも、この規定がどの程度順守されたのかは考古学的に疑問は多いが、縮小化の方向性は看取できる。終末期古墳では、巨大な墳丘は見られなくなる反面、高松塚古墳のように壁画を有するものや、外観よりも内部主体に贅を凝らすものが築造された。

第二節 大和政権と武蔵の古墳

南武蔵の古墳 武蔵の古墳は、多摩川下流域を中心に分布する南武蔵の古墳群と、荒川流域の埼玉県行田市埼玉古墳群に代表される北武蔵の二地域を核心として分布する。前者は海路を通じて太平洋岸から、後者は群

馬県方面からの影響を受けて成立した文化と推定されている。

南武蔵の古墳群は多摩川下流域と鶴見川流域に分布する。鶴見川流域では観音松古墳と白山古墳が盟主的存在である。観音松古墳は横浜市港北区日吉にあり、墳丘長八六メートルの前方後円墳である。昭和一三年（一九三九）の発掘で、内行花文鏡や銅鏃、勾玉、管玉などの玉類、碧玉製紡錘車などが発見され、四世紀後半に位置づけられよう。

白山古墳は川崎市幸区北加瀬にあり、一部削られているものの墳丘は約九〇メートル前後と推定される。昭和一二年の調査で、木炭櫛や粘土櫛の主体部が検出された。木炭櫛からは三角縁神獸鏡、小型の内行花文鏡、刀、剣などを出土したが、三角縁神獸鏡は京都府椿井大塚山古墳に同範鏡があり、大和政権と密接なかわりを示唆している。定期的に四世紀末、観音松古墳につぐものであろう。

ほかに鶴見川流域の古墳としては、日吉矢上古墳（直径二四メートルの円墳で甕文鏡二面出土）、稻荷前一号墳（墳丘長四七メートルの前方後円墳）などが四世紀末から五世紀前半にかけて築造された。

多摩川下流域を代表する古墳群は、太田区田園調布一帯に所在する旧荏原古墳群であり、現在では多摩川台古墳群と呼ばれている。かつては数十基の古墳があったと推定されているが、現在では消滅したものも多く、一〇基程度を

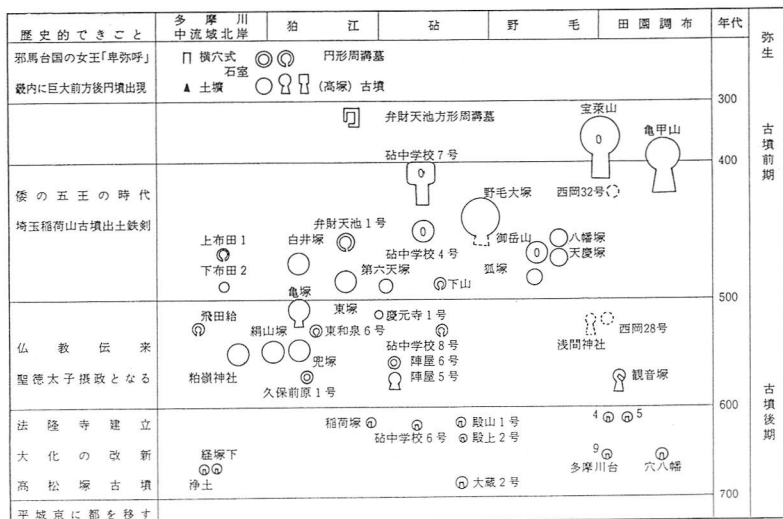


図 I-59 多摩川流域古墳の変遷 (世田谷区教育委員会資料より)

残すのみである。

最大のものは宝来山古墳で、昭和九年、土取り工事の後円部の大部分を失っている。推定墳丘長一〇〇メートルを超える柄鏡型前方後円墳で、四世紀初頭と考えられる奈良県桜井茶臼山古墳と類同の墳形である。墳丘破壊時に、長さ四メートル、幅二メートル程度の粘土槨が発見され、北端部から仿製四獣鏡一面、その西に勾玉、東に管玉、南に碧玉製紡錘車、粘土槨東西の端に鉄剣六振りが発見され、周辺に小玉や丸玉がみられた。

亀甲山古墳も同じ多摩川台にあり、こちらは後円部を一部削られただけで、よく旧形を残している。墳丘長一〇〇メートル、後円部高さ九メートル、前方部より三メートル以上高く古式の前方後円墳の特徴を備えている。未調査のため副葬品などについては不明であるが、宝来山古墳につぐ時期のものと想定されており、いずれも四世紀代に属するもので、最近、宝来山古墳に先行する年代を考える説もある。

いずれにしても全長一〇〇メートルを超える巨大な前方後円墳が、東京湾に近い多摩川下流域に最初に出現したことは、弥

類、刀剣類、鉄鏃などの武器類が出土した。

野毛の大塚 古墳

世田谷区内では、上野毛にある野毛大塚古墳も注目される。この古墳は明治三〇年（八七）に地元の人たちによって発掘され、多量の石製模造品などが出土したことから、五世紀中頃に位置づけられていた。ところが、平成三年再調査がおこなわれて、次の諸点が明らかとなった。即ち、規模は全長八四メートルの二段築成の帆立貝式古墳で、後円部径六七メートル、高さ一一メートル、前方部は幅二七メートル、長さ一五・五メートル、高さ二メートルを測る。そして、前方部右側に幅一〇メートル、長さ七・五メートルの造出部があり、馬蹄形状に周濠が全周する。墳丘上には多摩川の小礫を用いた葺石があり、埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、造出部には形象埴輪が配置されていた。造出部には土師器の高坏なども出土していることから、祭祀の場と考えられる。

亀甲山古墳の墳丘測量図

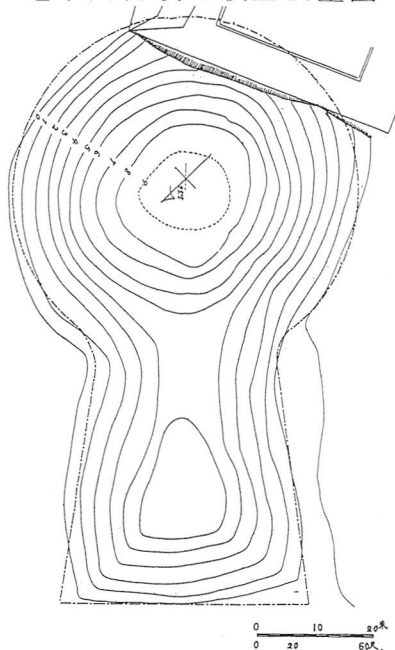


図 I-60 亀甲山古墳測量図

生時代以来開発の進んだ河口地域の沖積地での農業生産を背景に、大和政権の力が海路より波及したことを物語るもので、多摩川下流域を支配した盟主的首長の墳墓であることは間違いない。

これにつぐ古墳としては、野川流域の世田谷区砧きざな中学校七号墳があげられる。この古墳は墳丘長六五メートルの前方後方墳で、昭和一七年の調査で粘土槨の主体部から小型仿製鏡、玉



図 I-61 野毛大塚古墳 (世田ヶ谷谷)

主体部は墳丘頂部に三基以上存在したことが確認された。第一主体部は粘土槨で割竹形木槨、規模は幅一メートル前後、長さ八メートルを超える長大なものである。副葬品は武具（短甲、衡角付冑、鞍、盾）、武器（直刀一三、鉄剣四、鉄鏃など）、鏡（内行花文鏡）、玉類（勾玉、管玉、小玉、白玉）、石製模造品などが多量に出土した。この第一主体部は墳頂部に、墳丘の長軸に平行する形でつぐられ、本墳の本来的被葬者のもので、両側につぐられた第二・第三の主体部は追葬によるものである。ちなみに、第二主体部は組合せ式石槨で、直刀、鉄剣のほか、多量の石製模造品が、第三主体部は組合せ式箱形木槨で、直刀、丸玉などが検出された。

すでに破壊されていたと思われる野毛大塚古墳のこの結果は意外であった。と同時にこの古墳の重要性を再認識させられた。また、時期的にも従来考えられていた以上に古く、五世紀初頭の築造とみられるに至った。

野毛古墳群には、ほかに八幡塚古墳（直径三〇メートルの円墳）、天慶塚、狐塚などの五世紀代に属する古墳が存在し、最近確認された野毛四〇メートル、高さ七メートルの円墳）、天慶塚、狐塚などの五世紀代に属する古墳が存在し、最近確認された野毛四号墳（仮称）は六世紀後半と推定され、五世紀後半から六世紀代へと連続的に形成された古墳群であることが判明しつつある。しかし、多摩川下流域に五世紀以降、大形の前方後円墳が築造されることはなく、南武蔵の古墳群は規模を縮小していく。それに対し、北武蔵では大規模な前方後円墳が築造され、対照的なあり方を示している。

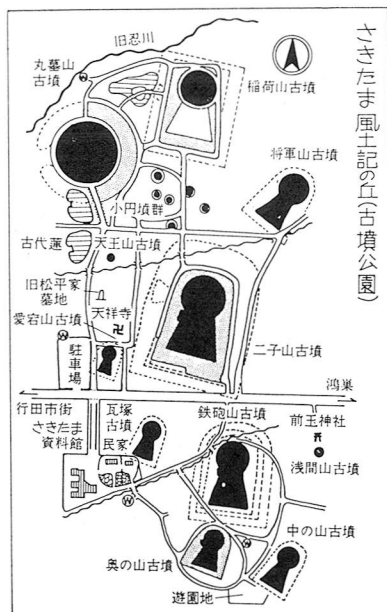


图 I-62 埼玉古墳群分布图

北武蔵の古墳 北武蔵の古墳群を代表する埼玉古墳群は、埼玉県行田市「さきたま風土記の丘」史跡公園にあり、五世紀後半から七世紀初頭にかけて累世的に形成されたものである。埼玉古墳群には、墳丘長一〇〇メートルを超えるもの四基を含め計八基の前方後円墳と、巨大な円墳の丸墓山古墳があり、今に往時の威容を示している。

稻荷山古墳は墳丘長一二〇メートルを測り、昭和一二年前方部が土取り工事で消滅したが、昭和四三年（一九六）の発掘調査で粘土槨と礫槨の二つの主体部が発見された。粘土槨は盗掘によって荒されていたが、礫槨からは画文帯環状乳四神四獣鏡や武具（刀、劍、挂甲等）、馬具（轡、辻金具、鞍金具、杏葉など）、勾玉、金銅製帶金具などが発見された。中でも注目を浴びたのは、発掘一〇年後の昭和五三年、出土した鉄剣に金象嵌で刻まれた一一五文字の銘

文が明らかになったことである。銘文の大意は

辛亥年七月中に記す。小生、乎獲居臣の先祖の名は意富比おほひこ、その児の名は多加利足尼たかりのすね、その児の名は亘巳てい加利獲居かりわけ、その児の名は多加披弥獲居たかはひわけ、その児の名は多沙尼獲居たさきわけ、その児の名は半亘比はてひ、その児の名は加差かさ披余はら、その児が私、名を乎獲居臣という。昔から杖刀人の首おきみ（責任者）として今斯鬼宮しきみやで政治をとる獲加多わかた支鹵大王おきみの時代に至るまでその政治を支えてきた。この百鍊利刀にそのことを記しておく。



図 I-63 稲荷山古墳（埼玉古墳群）『稲荷山古墳』より

とあり、稲荷山古墳の被葬者と考えられる乎獲^お居^{わけ}臣^{のおみ}の祖先が代々、大和政権に仕えてきたことを記している。

銘文の解釈には問題点もあるが、「獲^わ加^か多^た支^し鹵^る大王^{のおおきみ}」は記紀の「若建」、「幼武」に比定され、雄略天皇と考えられている。また、冒頭の「辛亥年」は西暦四七一年とする見解が有力である。こうしたことから、異論もあるものの、稲荷山古墳は五世紀後半に位置づけられ、埼玉古墳群成立期のものと考えられ、同時に武蔵と大和政権の関係を具体的に呈示した貴重な資料である。

埼玉古墳群はその後、二子山古墳（墳丘長一三五メートル）が六世紀前半に、鉄砲山古墳（墳丘長一一二メートル）が六世紀中葉から後半に、將軍山古墳（墳丘長一〇二メートル）が六世紀末から七世紀初頭に相ついで築造されたと推定されている。埼玉古墳群には、ほかに中の山古墳（墳丘長七九メートル）、瓦塚古墳（墳丘長七一メートル）、奥の山古墳（墳丘長六七メートル）、愛宕山古墳（墳丘長五三メートル）などの前方後円墳と、直径一〇二メートル、高さ一九メートルの巨大な円墳、丸墓山古墳がある。

北武蔵では、ほかに比企地方に諏訪山古墳（墳丘長六六メートル）、

雷電山古墳（墳丘長七六メートル）、野本將軍塚古墳（墳丘長一一五メートル）の前方後円墳があり、いずれも未調査で詳細不明ながら、五世紀前半から六世紀初頭に築造されたものと思われる。しかし、比企地方はその後、大規模な前方後円墳は姿を消し、北武蔵が埼玉古墳群に代表される勢力に統合されたものと考えられる。

武蔵国造の内 南北武蔵の古墳群の盛衰を、『日本書紀』卷第十八の安閑天皇元年（五四）、武蔵国造職をめぐる争紛と古墳分布 いと結びつけて解釈したのは甘粕健である。『日本書紀』によれば、

武蔵国造の笠原直使主かまたらのあたいおみと同族の小杵おぎが国造職をめぐって長年対立した。小杵は性格が荒々しく、高慢で大和政権にしたがう姿勢がなかった。そして、小杵はひそかに上毛野君小熊かみつけの きみおぐまに援助を求め、使主を殺そうと謀った。それに気付いた使主は、朝廷に援助を求めた。事情を知った朝廷は、使主を国造に任命し、小杵を誅殺した。喜んだ使主は、感謝のしるしに、横渟よこぬ・橘花たちばな・多水くらす・倉櫛くらすの四か所を、屯倉みやけとして朝廷に献上した。

という内容である。甘粕健は南北武蔵の大古墳を首長墓ととらえ、四、五世紀に栄えた南武蔵の古墳群が、六世紀以降北武蔵に中心を移した状況を、安閑紀の武蔵国造の内紛と結びつけて解釈した。即ち、小杵の本拠地が南武蔵であり、使主の勢力圏を埼玉古墳群を中心とする北武蔵と考え、滅亡した小杵の支配地である南武蔵四か所が屯倉として朝廷に献上されたとするものである。

四屯倉については、横渟よこぬ（横見郡、埼玉県東松山市周辺）、橘花（橘樹郡、神奈川県川崎市付近）、倉櫛（久良岐郡、現横浜市付近）、多水（多末の誤記とされ、多磨郡、現在の多摩地方）にそれぞれ比定されている。

しかし、最近、この説に対しては年代的に若干無理があるとの指摘もある。即ち、南武蔵の勢力衰退は五世紀後半であり、安閑紀の六世紀前半（五三四年）とは約半世紀のずれを生じてしまう。金井塚良一は、安閑紀の記述は北武

藏の埼玉古墳群を形成した勢力と、同じ北武蔵の比企地方を本拠とする勢力との争いとの見解を示している。

第三節 多摩川上・中流域の古墳

古墳群の分 多摩川流域の古墳は、下流域に四〇五世紀の大型前方後円墳がみられるが、上・中流域には時期的に新しい小古墳が分布する。もっとも、本市を含む多摩川左岸では昭島市域より上流には古墳が知られておらず、開発の遅れと古墳を築造するような勢力が存在しなかったことを示している。

次に、多摩川上・中流域の古墳を下流域から順に概観しておきたい。

〔**狛江古墳群**〕野川水系に立地し、東の世田谷区喜多見古墳群と一体をなすものと思われる。帆立貝式の前方後円墳を盟主とし、数十基が存在したが、大部分が消滅した。亀塚古墳は昭和二〇年代の発掘によって、二つの木炭槨と組合せ式石棺の三つの主体部が検出された。木炭槨からは神人歌舞画像鏡、毛彫りの金銅製飾り金具、馬具、武器のほか、円筒埴輪、形象埴輪も発見されている。特に、神人歌舞画像鏡は同範鏡が高句麗系渡来人の多い大阪府道明寺付近から出土しており、調査を担当した大場磐雄は、亀塚の被葬者を高句麗系の渡来人と想定した。亀塚は時期的には五世紀末から六世紀初頭の築造と考えられる。

狛江古墳群では亀塚に先行する時期のものとして、最近発掘された弁財天池1号墳や白井塚、経塚といった直径四〇メートル程度の円墳が、また、亀塚につづくものに絹山塚、兜塚があり、五世紀中葉から六世紀中葉を中心とする初期群集墳である。

第3節 多摩川上・中流域の古墳

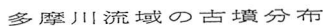


図 I-64 多摩川上・中流域の古墳分布 世田谷区郷土資料館図録より

〔高倉古墳群〕府中市西部、分倍河原周辺の古墳群で、これまでに十数基が確認されている。平成二年の調査で、河原石積み石室から太刀、刀子、鉄鏃などが発見され、六、七世紀代の古墳群といわれている。従来、比較的不明確であった国府形成以前の府中地域の様相を知る上で貴重な存在である。

〔下谷保古墳群〕国立市下谷保の立川段丘縁辺にあり、現在二基を残すのみであるが、ほかに二基存在したことが判明しており、古墳群を形成していたものと思われる。下谷保1号墳は直径一四メートル、高さ二メートルの小円墳で、昭和六〇年に発掘調査をおこなった。その結果、河原石積みの胴張りプランの横穴式石室が検出された。石室の天井は崩落していたが、玄室は長さ二・七メートル、幅は奥壁で一・五メートル、中央部で一・八メートルを測る。副葬品としては直刀、鉄鏃などがあり、七世紀前半の築造と推定される。

〔青柳古墳〕国立市青柳の多摩川を見下ろす段丘上にあり、一基が調査されただけであるが、ほかにも古墳らしいものがある。また、明治一八年（一八八五）に太刀五口、金環、土偶（形象埴輪か）が出土した記録があり、戦後、この付近から円筒埴輪二本が採集されている。こう



図 I-65 下谷保1号墳（国立市）の石室

した状況から判断すると、複数の古墳が存在したであろうことが推定される。青柳古墳の調査は、わずかに残った地ぶくれ状の墳丘が、昭和六二年、開発でつぶされるために実施した。その結果、石室の一部を検出し、土師器坏、円筒埴輪片を発見した。埴輪をもつ古墳の存在は重要で、埴輪をもたない古墳の被葬者との間に力の差があったものと考えられる。青柳古墳は多摩川左岸の埴輪をもつ古墳としては最上流部に位置し、日野市七ツ塚古墳とともに注目される。青柳古墳は時期的には六世紀末と推定され、下谷保1号墳に先行する在地の有力者を葬ったものであろう。

〔塚原古墳群〕多摩川右岸、多摩市の大栗川流域には二〇〇三〇基の古墳が存在した。現在は七世紀前半の築造とされる稲荷塚、臼井塚など数基が残るにすぎない。最近の調査で特に注目されるのは稲荷塚古墳である。この古墳は過去の調査で直径一八メートルの円墳とされ、凝灰岩切り石積みで胴張り構造の横穴式石室が古くから開口していて、副葬品などは知られていなかった。

ところが、平成二年の調査で、周溝外端長三八メートル、内端対角長三四メートルの八角形古墳であることが判明し、大きな話題となった。八角形古墳は全国的にも珍しく、天智天皇陵、天武・持統両天皇合葬陵、舒明天皇陵に比定される段ノ塚古墳、文武天皇陵とされる中尾山古墳など、畿内の天皇陵にほぼ限定されるからである。これらの中で最古のものは、段ノ塚古墳が舒明天皇陵であれば、没年が六四三年で七世紀前半末となる。この点、なぜ、多摩の地に八角形墳が存在するのかとあわせて、従来考えられてきた稲荷塚古墳を七世紀前半とする年代観にも再考を迫る

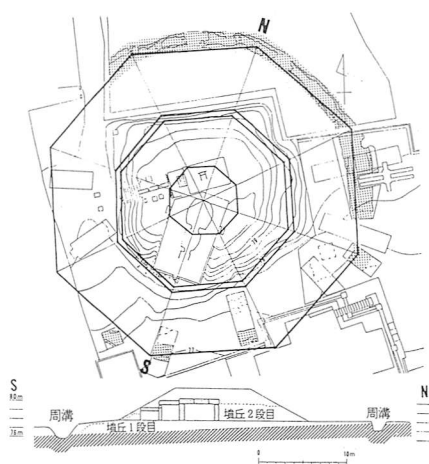


図1-66 稲荷塚古墳（多摩市）の実測図

ものである。稲荷塚古墳は、立派な切石積み石室を有することから、これまでも多摩地域の古墳を語る場合に重視されてきたが、被葬者などを含めて新たな問題が提起されたこととなり、今後の研究に委ねられる課題も多い。

〔七ツ塚古墳群〕日野市北西部、多摩川に谷地川が合流する地点の東に立地し、その名が示すように七基以上の古墳が存在した。明治時代に武人と鬻を結った女子の埴輪頭部が発見され、付近からは円筒埴輪の破片も採集されている。しかし、これらの埴輪を出土した古墳については明らかでないが、埴輪は六世紀後半のものと推定される。一方、昭和二九年（一九五四）の調査では、河原石積みで胴張り

構造の横穴式石室が検出され、七世紀前半と推定された。こうした点から、七ツ塚古墳群は、約一世紀近くにわたって在地の有力者によって築造されたものと思われる。

また、七ツ塚からはかつて有茎の銅鏃と碧玉製磨製石鏃が発見されている。もっとも後者の出土地は若干不確かな面があるが、前者は現在埼玉県秩父市の長瀬総合博物館に所蔵されている。銅鏃は古墳時代前期から中期中頭の特徴的副葬品で、それ以後にはみられない。こうしたことから、七ツ塚に前期ないし中期中頭にさかのぼる古墳が存在する可能性も否定できない。

〔その他の古墳〕多摩川左岸では調布市布田古墳群、右岸では八王子市の滝山丘陵上、多摩川を見下ろす宇津木台に

小宮古墳がある。浅川流域では日野市平山に、消滅したものを含めて相当数の古墳が、八王子市では長径二九メートル、高さ三・五メートルで、三室からなる長さ一〇メートルの切石積み石室をもつ大谷古墳おおやがある。また、川口川や南浅川流域にも小規模な円墳が点在するが、これらはいずれも河原石積みの石室をもち、多くが七世紀代に属するものと思われる。

なお、本市に隣接するものとして、昭島市浄土古墳群と秋川市瀬戸岡古墳群があるが、これについては次項で詳述したい。

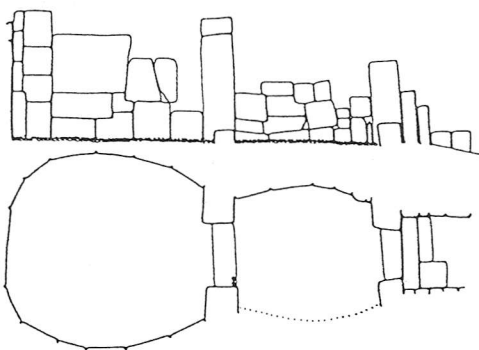
第四節 瀬戸岡古墳群と浄土古墳群

多摩川中流域 多摩川中流域の古墳は、大別して三類型が認められる。即ち、①切り石積みの石室をもつもの、②古墳の三類型 河原石積み石室のもの、③横穴墓である。

①の切り石積み石室は、胴張りの複室構造を特徴とし、八王子市北大谷古墳は三室の最奥部のみが胴張り、多摩市稲荷塚古墳は二室で前後室ともに胴張り、同市臼井塚は後室のみ胴張り構造を有する。石室平面が胴張りするのは、多摩地域や埼玉県比企地方に特有のもので、渡来系氏族との関連が指摘されている。年代的にこれらの古墳は六世紀末から七世紀初頭に位置づけられ、稲荷塚古墳は臼井塚古墳に先行し、七世紀第一四半期とされていたが、八角形墳であるとなると、時期的にやや下降することも考えられる。しかし、いずれにしても大きな切石を用いた石室の築造には多大の労力を要し、被葬者の強大な勢力を象徴するものであることは間違いない。

第4節 瀬戸岡古墳群と浄土古墳群

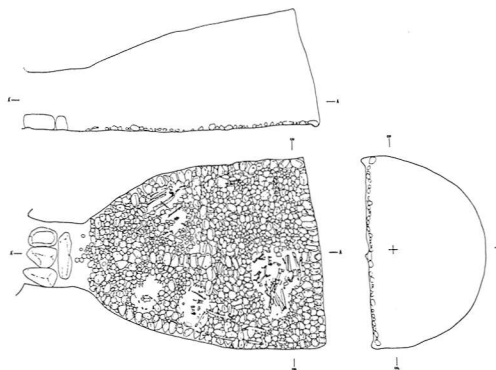
②の河原石積み石室は、河原石材に恵まれた多摩川中流域での環境に適した素材で、運搬、構築も容易である。このタイプで古手に属するのは、日野市平山2号墳で、副葬品から六世紀末と推定されている。しかし、この段階では胴張りせず、七世紀前半に切り石積み石室の影響を受けて胴張り構造が導入されたようである。この時期の代表的なものに下谷保1号墳、日野市万蔵院台1号墳、瀬戸岡2号墳などがあり、七世紀後半のものとして瀬戸岡1号・5号墳、浄土1号墳、昭島市経塚下古墳などがある。そして、七世紀末には瀬戸岡3号・4号墳など胴張りが不明瞭な、箱式石棺墓的な横穴式石室に変化していったものと考えられる。



①切り石積み石室
(多摩市稲荷塚古墳)



②河原石積み石室
(秋川市瀬戸岡2号墳)



③横穴墓

(国立市谷保東方横穴墓)

図I-67 古墳の3類型『日野市史』ほかより

③の横穴墓は、崖や台地斜面に横穴を掘削して墓室としたものであり、全国的にみられる群集墳の一種で、古くから埼玉県東松山市の吉見百穴が有名である。多摩川中流域では日野台地の縁辺や多摩市、稲城市、多摩川左岸では国立市以東の段丘崖などにあり、立川市以西では未発見である。

本地域の横穴墓は、おおむね七世紀中葉以降、八世紀代にわたるもので、多摩市中和田横穴墓群や日野市坂西横穴墓群のように、胴張り複室構造という切り石積み石室の構造を模したものの存在から、その影響下に展開したことを示している。横穴墓からは人骨、土師器、須恵器、直刀、鉄鏃などが出土し、高塚古墳の副葬品と同じで、中には八王子市大和田横穴墓群（饅頭屋横穴）のように、銅鏡や師切先太刀を出土した例もあり、かなり上級階層の墓と推定される例もある。しかし、多くは新興の有力農民層を基盤として創出された世帯共同体の家族墓的性格のものであったろう。

当初、強大な権力者の権威の象徴として成立した高塚古墳も、ここに至って墓としての様相を鮮明にし、一時代を画した古墳時代も終焉する。それは仏教導入による葬制の変化とも相まって、単なる形態上の変化だけではなく、人間或は人生というもののへの意識や観念の変化でもあったはずである。

瀬戸岡古墳群の調査

福生市の対岸、秋川と平井川に挟まれた秋留台地の北端には、終末期の群集墳として著名な瀬戸岡古墳群がある。かつて三六基以上の存在が確認されていたが、今は二六基を残し、都の旧跡に指定されている。この古墳群を有名にしたのは、昭和二五年、後藤守一の指導で発掘されてからである。

瀬戸岡古墳はいずれも土石混合の墳丘を有する小円墳で、いわゆる積石塚古墳とされている。積石塚とは河原石や山石が墳丘をおおうもので、北信濃の千曲川右岸などに特に多い。積石塚という特殊な形態の古墳のもつ意義につい

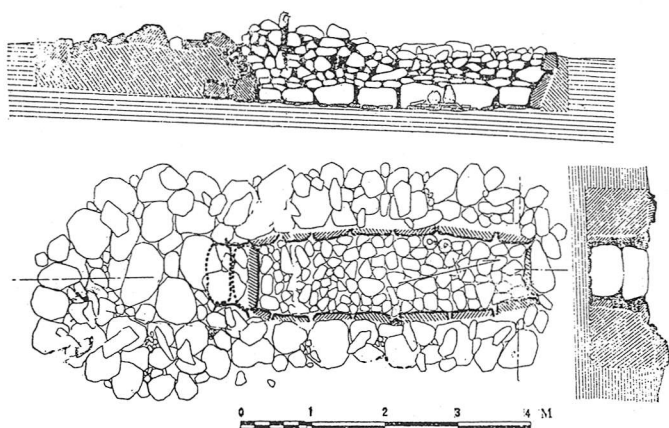


図 I-68 瀬戸岡1号墳実測図

ては、環境自生説と大陸墓制説があり、被葬者の性格をめぐる種々論議のあるところである。瀬戸岡古墳の主体部は、河原石乱石積みの横穴式石室であるが、石室が地平面下に構築されていることから「横穴式石室的堅穴石室」という奇妙な名称で呼ばれてきた。後藤守一らの調査で発掘された五

基の古墳を、池上悟は石室の企画から2号墳↓5号墳↓1号墳↓3号・4号墳の変遷を考え、いずれも七世紀後半の年代を与えている。

図 I-68 は瀬戸岡1号墳の実測図である。右側が奥壁で、二個の大きな河原石が据えられ、平面形は胴張りし、左側が義道部^{せんだう}で、断面から玄室入口が河原石で閉塞された状態が看取できる。石室天井は崩落していたものの、本来は細長い河原石を持ち送り状に積み、アーチ形を呈していたと思われる。石室内から土師器甕と須恵器壺の二個の火葬骨壺が出土したため、本墳を含む瀬戸岡古墳群の年代を奈良時代と結論づけた。この年代観がかなりの影響力をもったため、一時、この種の古墳を奈良時代の所産とみる傾向があった。しかし、これらの火葬骨は古墳の再利用であり、古墳の築造そのものは七世紀後半とみるのが妥当である。また、胴張りアーチ状石室の積石塚ということから、高句麗系渡来人との関連が想定され、本古墳群を形成した集団の性格が問題視されている。

浄土古墳群と 古墳の終末

浄土古墳群は、昭島市田中町から大神町にかけての多摩川に面する段丘上にあり、小範圍から五基が発見された。この古墳は現在まったく墳丘をもたず、開発にともなう事前調査で主体部のみが発見された。

浄土1号墳は、玄室長四・五メートルの胴張り横穴式石室で、側壁は河原石を持ち送り状に積んでいる。奥壁は凝灰岩の一枚石で、切り石積みと河原石積み石室の折衷的要素をもっている。遺物は床面から金銅製耳環一対が検出されただけである。

浄土2号墳は長さ一・五メートル、3号墳は二・三メートル、4号墳は二・五メートルで、いずれも胴張りの河原石積みで、箱式石棺の様相の石室である。特に、4号墳は迫り持ち状の側壁に天井石まで完全に残存していたが、床



図 I-69 浄土1号墳

面からの最大高六〇センチメートルで、とうてい石室内で人間が行動できる空間ではない。また、5号墳は石室長一メートルの超小型石室である。

右に述べたように、浄土1号墳と2・3号墳では相違が歴然としている。1号墳は入口が明瞭に閉塞されており、横穴式石室の基本的形制を踏襲している。それに対し、2・3号墳は縦穴式石室の形制をとり、遺骸の埋納は上部からおこなわれた。1号墳は石室内で人間がかんで行動できるだけのスペースがあり、入

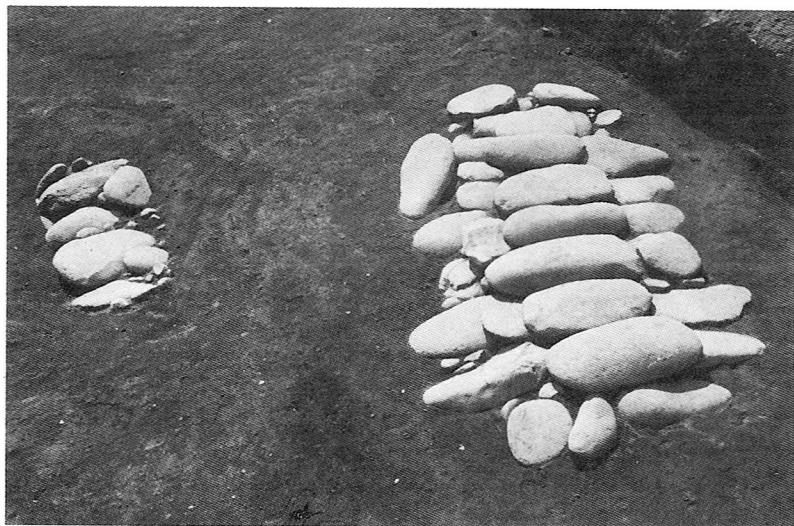


図 I-70 浄土古墳群 (右4号墳, 左5号墳)

口の閉塞石をはずせば追葬も可能である。しかし、2・5号墳は明らかに被葬者一人用の石棺墓的で、古墳というよりは墓と呼ぶに相応しい性格へと変化している。また、4号墳のように、石室が完全な形で残存しながら副葬品が一切検出されなかったことも、古墳としての性格をすでに失っていることを示している。こうした古墳の被葬者は、世帯共同体の家父長層とその家族と推察される。

瀬戸岡古墳群、浄土古墳群とも、現在これらを創出したと推定される人々の集落跡は発見されていない。また、古墳群に行するような集落も解明されておらず、古墳群が他地域からの流入者によって形成された可能性も大きい。その年代が大化の改新後、律令制が成立していく七世紀後半であれば、中央の政治的動向との関連も十分考慮する必要がある。

第五節 古墳時代の集落と生活

古墳時代の土器
土師器の変遷

福生市域で古墳時代人の痕跡を伝えるのは、市内最東端、熊川団地周辺で採集された土師器片である。古墳時代には、弥生土器の系譜を引く素焼きで無文の土師器が主に使われ、後期には硬質の須恵器も混じるようになる。

南関東の土師器は、五領式、和泉式、鬼高式に編年されている。五領式は埼玉県東松山市五領遺跡の土器を標式とし、古墳時代前期の四世紀代を中心とする。壺、甕、台付甕などに弥生土器の系譜を継承しながらも、小形器台、埴

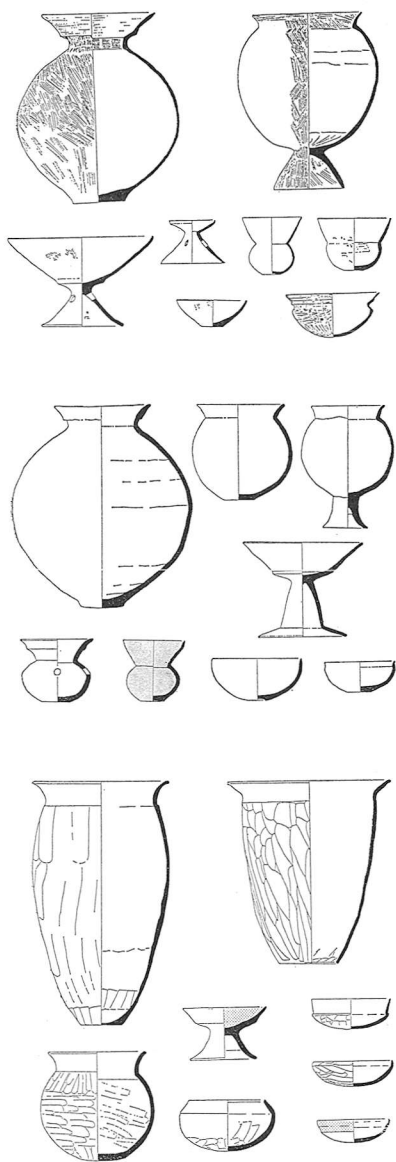


図 I-71 古墳時代の土器
上段五領式、中段和泉式下段鬼高式
『日本の考古学』より集成

高坏^{なかつき}など祭祀性の強い器種が畿内から導入された。

和泉式は東京都狛江市和泉遺跡の土器を標式とし、五世紀を中心に古墳時代中期に相当する。土器は胴部に丸味をもった壺や甕を中心に、長脚の高坏などをともなう。

鬼高式は千葉県市川市鬼高遺跡の土器を標式とし、古墳時代後期、六、七世紀代に相当する。土器は甕の長胴化が顕著であるが、これはこの頃から、堅穴住居にカマドが構築されるようになったことと対応する。炉に代ってカマドがつくられるようになると、カマドにかけられた甕は土製支脚で支えられ、甕^{こしき}と組み合わせて炊事がおこなわれるようになったためである。ほかに、坏や祭祀用の高坏などもある。

熊川団地周辺で採集された土師器は、鬼高式期のものである。熊川団地に隣接する拝島団地建設に先立つ山ノ神遺跡の調査で、鬼高式期の住居址三軒が発見され、この付近に古墳時代後期の集落が存在したことが証明された。

古墳時代後期の住居と集落

山ノ神遺跡は福生市と昭島市の境界に位置し、昭和四一年（一九六六）に発掘された。1号住居址は一辺が六メートル×七メートルの長方形プランで、北西寄りにカマドが築かれていた。住居内からは甕三個、甕二個、坏四個などの土師器が発見されたが、床面に柱の炭化材が残っていたことから、火災で焼失したのと思われる。2号住居址は一辺六メートルのほぼ長方形で、北辺中央にカマドをもっている。カマド内に土製支脚、周辺部から甕三個、甕一個、坏二個体が発見された。また、床面中央から祭祀用の蠟石製玉二個が発見された。これは榊^{さかき}の枝などにかけられ、祭事に用いられたものであろう。3号住居址は一辺六・六メートルの整然とした方形プランで、北壁中央にカマドが据えられ、両端に甕と甕がおかれていた。山ノ神遺跡のカマドで特徴的なのは、焚口の両袖に細長い河原石を立てて補強している点にある。三軒の住居に共通するのは、どの家にも甕・甕・坏がセットで存

在すること、甕は煮炊き用、甗は蒸し器、坏は飲食物を盛る器として用いられている。

山ノ神遺跡の三軒の住居址は、いずれも六世紀代、鬼高式期前葉のもので、当時、多摩川を望む段丘上に小集落が存在したことが証明された。本市域では縄文後期末から空白の時代が長く続き、弥生時代から古墳時代中期に至るまで無人状態が続いたが、六世紀に至

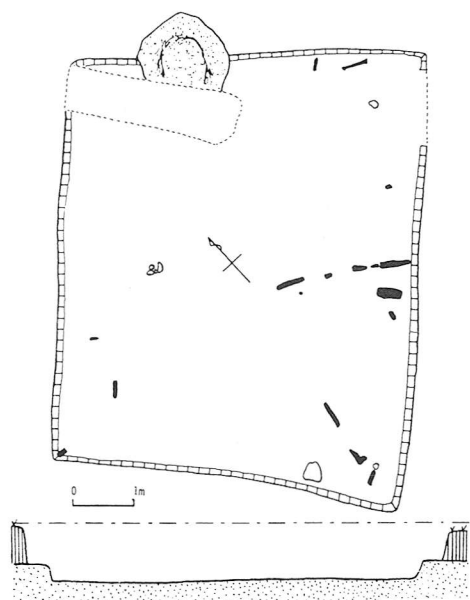


図 I-72 山ノ神遺跡（昭島市）1号住居址実測図

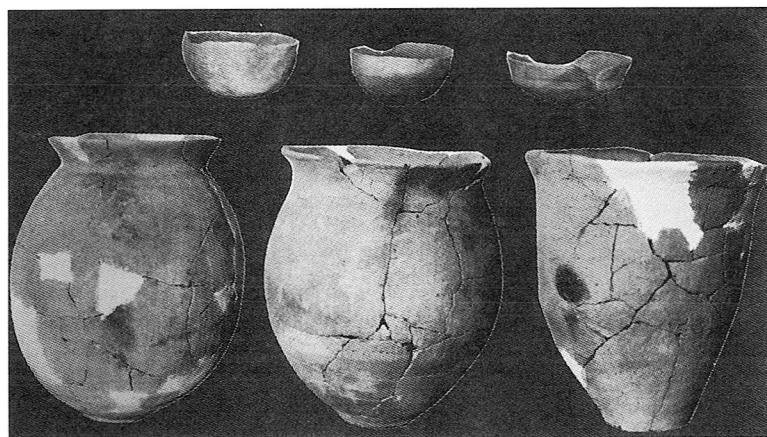


図 I-73 山ノ神遺跡の鬼高式土器
上段坏，下段左 2 個体甕，右甗

第5節 古墳時代の集落と生活

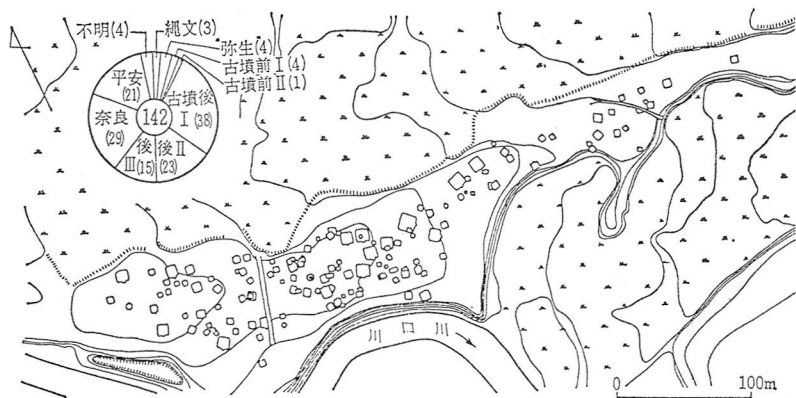


図 I-74 八王子市中田遺跡の集落『日本考古学を学ぶ』3より

ってようやく人間活動の痕跡を見出すことができるようになった。また、同時期の集落として羽村市根搦前遺跡^{ねはきまへ}があり、多摩川流域の開発が徐々に進んできたことを示している。

鬼高式期以降、多摩地域では急速に集落の発展がみられる。その傾向は浅川や川口川といった八王子地域に顕著で、八王子市船田遺跡では二〇〇軒を超す住居址が、中田遺跡からも七六軒の竪穴住居址が発見されている。これらの住居址はもちろんすべてが同時に存在したわけではないが、仮りに二〇軒前後がムラを形成したとしても、それ以前と比較にならない規模となる。これらの大集落はいずれも平坦な低地や微高地に営まれていることは、丘陵上の小規模集落とは対照的である。

突然出現した感のあるこれらの大集落は、先に述べた安閑紀の記事とかかわりをもつものではなからうか。多摩の地が、笠原直使主によって朝廷に献上された四屯倉の一つであったとするならば、屯倉の管理や生産に従事する人々がどこからか移住させられた可能性は高い。屯倉の管理には渡来系氏族の活躍が知られており、多摩と渡来人の関係も追及されなければならない。

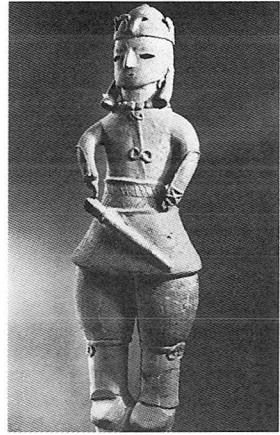


図 I-75 人物埴輪

古墳時代人の生活

山ノ神遺跡や八王子市域に居住した古墳時代人の生活は、農業を中心としたものであったろう。農具の主流は木製品であったが、遺跡からは鉄製の鎌、鋤、鍬、斧なども発見され、徐々に生活の中に採り入れられていった。

食生活はカマドの導入によって大きく進歩し、甑を使って蒸して調理する方法も一般化した。米のほかムギも多く栽培され、アワ、ヒエ、大豆などの雑穀や豆類のほか、野菜も食膳を賑わしたであろう。また、ときに応じて縄文時代以来の採集や漁業も食生活に潤いを与えた。

衣服は埴輪の人物像などから推定することができる。一般に男は上衣とはかまの組合せで、上衣は簡袖の短い着物の合せ目を紐で結び、下衣はズボンの太いようなものを膝下で結ぶ。女は上衣は男と同様で、下衣はスカートのようなものをつけている。なお、頭髮は男は髪を左右に分けて垂らした美豆良みずら、女は束髪状の髻まげを結うのが普通である。古墳時代人の精神面は埴輪祭式など、墓前での儀礼の様子はよく知られているが、一般的にも農耕や祖先祭祀にもなう儀礼がおこなわれていた。農耕儀礼としては豊作祈願や収穫を感謝する祭式が毎年おこなわれたであろう。